

明治期の作法書史における 『智恵袋』『心頭語』と『處世交際法』位置づけの試み

吉村 暁子

Abstract: 本論は、18世紀ドイツの作家クニッゲの『人間交際術』の翻訳である森鷗外の「智恵袋」「心頭語」と笛川漁郎の『處世交際法』とを、明治時代の〈社交〉〈交際〉を主題とする多数の作法書のなかに位置づけを試みるものである。まず近代的「社交」「交際」の問題に関して、明治時代の通俗的書物を対象に含む先行研究を参照し、日露戦争後の「立身出世」志向の低下と「修養」書の勃興の視点を含めると、『處世交際法』は人格の完成を目指す「修養」書としてとらえられる。

Keywords: クニッゲ, 森鷗外, 『處世交際法』, 社交, 修養, 立身出世

1. はじめに

18世紀ドイツの文筆家アドルフ・F・クニッゲ (Adolph Freiherr Knigge, 1752-1796) の著『人間交際術』 (*Über den Umgang mit Menschen*, 1788) は、クニッゲ自身が宮廷生活で受けた寵愛と失脚の経験から、多種多様な相手との社交生活における振る舞いの方法や心の持ち様、いわゆる処世術 (Lebensklugheit) を扱った作品である。彼の著作は文学史上特段の評価を得ることはなかったが、『人間交際術』は刊行直後からベストセラーとして版を重ねた。その内容はあくまで食卓でのマナーのような礼儀作法を扱うものではなかったが、やがてその著者名は礼儀作法書やハウツー本、ひいてはさまざまな分野への入門書を表す普通名詞と化した。¹

この『人間交際術』が日本にその名を現したのは、1890 (明治23) 年に森鷗外の『うたかたの記』においてである。この時はその書名が挙げられたにすぎなかったが、1898 (明治31) 年以降に新聞連載の形で発表された鷗外の箴言集「智恵袋」「心頭語」として、著者名が伏された状態で日本語に抄訳されていることが小堀桂一郎によって指摘されていた。² 一方で筆者は、底本がクニッゲの『人間交際術』であることを明かしている翻訳としては1910 (明治43) 年の

-
- 1 19世紀以降に「良きふるまい」(Der gute Ton, Gutes Benehmen) と題される礼儀作法の書 (Benimmbücher, Anstandsliteratur) 類が多く見られるようになったが、そのなかで取り上げられるうちに『人間交際術』は、これらと同類の書物あるいはその代表的書物として扱われるようになる。その過程でクニッゲの名は彼の著書それ自体から、「マナーブック」あるいは「入門書」へと換喩化した。Vgl. 吉村暁子「クニッゲ『人々との交際について』の今日的意義—都市生活における行動規範の形成と伝播に関する実用書の役割—」(立教大学大学院修士論文, 2002年) 巻末資料1
 - 2 小堀桂一郎訳・解説『森鷗外の「智恵袋」』(講談社) 1980年, 430頁。なお鷗外はその後「慧語」という箴言的文章を1903 (明治36) 年から6回にわたって雑誌「新小説」に「痴人」の書名で掲載するが、原本となったのはバルタザール・グラシアン (Baltasar Gracián y Morales) の『神託提要・処世の術』(*Oráculo manual y arte de prudencia*, 1647) のショーペンハウアーによるドイツ語訳 *Handorakel und Kunst der Weltklugheit* (翻訳1832年, 刊行1862年) である。「智恵袋」「心頭語」「慧語」はいずれも、鷗外存命中に本として出版されることはなかった。

笛川漁郎（生没年不詳）による『處世交際法』がおそらく初めてのものであることをすでに指摘した。³ 訳者の笛川は、1907（明治40）年に『社交談話法』⁴の名でW. F. カールトンの著作を訳して好評を得た人物で、『處世交際法』はその「姉妹編」たるものとして刊行する⁵と語っている。開国後の西洋文化導入の大きな流れの中で、「大翻訳時代」とも呼ばれるこの時期には、歴史、地理、政治学、法学、医学など多岐に渡る分野への入門書的位置づけの作品が持ち込まれたが、その中には礼儀や交際、処世、出世に関する書物もまた含まれており、『人間交際術』の翻訳もこれらの書のうちの一つであった。

本稿は、鷗外の「智恵袋」「心頭語」という翻訳行為を、鷗外研究の外側の視点で語るための前段階として、笛川の『處世交際法』の翻訳とともに、明治時代の「西洋化」を求める過程で当時多数刊行された「礼儀作法」や「社交」、「交際」、「処世」を扱った通俗的読み物の流れの中でどう位置づけられるのかを考察するものである。そのためまずは明治時代の交際や社交に関する先行研究を把握し、足掛かりとしたい。

2. 明治時代の交際指南書史

2.1 先行研究

『五箇条の御誓文』（1868年）において「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」と宣言されたように、明治政府は国民の生活を西欧社会と遜色ない水準へ高め、近代的国民国家を形成することを急務と捉えていた。また四民平等をうたい、身分制度が廃止され階層の上下移動の可能性が生じたこと、ならびに鉄道という近代的交通機関の敷設とその拡大により、庶民の行動範囲は急速に広がった。これらの急速な社会状況の変転に対し、政府は優秀な若い人材を求め、公教育を通じて国民の啓蒙に取り掛かった。1872（明治5）年には学制を公布して中央集権的な近代的教育制度を定めたが、その際には「修身科」が学習科目に加えられ、公的教育の場で道德教育が開始された。この「修身」においては、はじめは欧米から翻訳された書物が教材として用いられ、近代西洋倫理の導入が図られたのであった。⁶ また学制と同年に「違式違違条例」が公布され、「裸體又ハ袒裄シ或ハ手脚ノ露ハシ醜躰ノナス者」（第22条）などみだりに裸体を晒したり往来で排泄したりする行為が罰せられるようになった。風俗や交通、衛生等、日常生活秩序維持に関わる軽微な犯罪と処罰が定められることで、近代的都市生活をおくる上での身体的規範が示された。これらの生活空間や伝統的な生活慣習の変化に伴い、交際上の慣習も変化を迫られるなかで、西洋式の生活様式における礼儀、社交や交際を扱う通俗的な書物が多数発行され、またこれらの書物によって、やがて「社交」「交際」といった語が日本に導入されていった。

さて日本の社交および交際の慣行に関する研究は、そもそもこの行為が、宮廷やムラでの祭祀、武家や公家社会の礼法、茶の湯やいけばな、能楽などの芸能における所作、寺子屋での「御談義」「講談」あるいは公教育における「修身」としての道德教育や礼法・作法教育など、日常・非日常問わずあらゆる場面でおこなわれるが故に、宗教、教育、歴史等各学問分野で広くおこなわれてきた。また「社交」「交際」の理想形については、具体的所作を定める儀礼的形式

3 吉村暁子「もうひとつのクニッゲ邦訳—笛川漁郎『處世交際法』」（高橋輝暁先生定年退職記念文集1《日独文化論考》ASPEKT別巻1、99～110頁、2014年）。

4 笛川漁郎訳『社交談話法』（玄黄社）1907。原著はW. F. Carlton: *The art of conversation*。発行年他不明。

5 笛川漁郎訳『處世交際法』（玄黄社）1910、3頁。（訳者緒言）

6 代表的なものとして阿部泰蔵訳『修身論』（文部省編纂）1874（明治7）がある。アメリカの牧師フランシス・ウェーランド（Francos Wayland）によるElements of Moral Science（1835）の簡約版の翻訳。

と、自己と他者との関わりに関する倫理的・精神的修養とが、西洋からの翻訳とこれに対する反動的な形で混然となって語られる。明治後期にはさらに「処世」や「立身出世」、「国家」「修養」というキーワードが加わるため、さらに主題は複雑化する。しかしここで注目するのは、あくまで「社交」「交際」を話題とする通俗的な雑本の類で、食事のマナーなどの礼儀作法や身体の振る舞いの形式のみを対象とする種ものは除く。

日本における近代的「社交」「交際」の問題に関して、明治時代の通俗的書物を対象に含む先行研究としては、まず熊倉功夫⁷や薄井明⁸らが挙げられる。熊倉や澤井の問題意識は、「社交」「交際」の生み出す人間関係よりは、むしろ「礼法」、つまりマナーという身体的所作の規範の成立にあり、平安以前から昭和初期にかけての日常生活における礼儀作法の変遷から「国民礼法」がいかに要請されるに至ったかを検証している。⁹

竹内里欧¹⁰は明治期の礼儀作法書を素材に「紳士 (gentleman)」に関する言説の変遷を明らかにするところにその意図があったが、その対象となる「礼儀作法書」に関しては、いわゆるマナーブックと社交や交際を主とする書を包括的にとらえる。明治時代を中期までの前半と、半ばから大正期にかけての後半とに分け、前半期は西洋文化の導入と紹介が主たる動機であること、後半期は「交際」や「社交」をキーワードとする「人間関係の技術や理想像を教えるものとしての作法書」が多く出版されたとし、その理想像としての「紳士」像のうちに「西洋的」なるものを軸とする同化と排除の力学的場を見出した。

石原千秋¹¹は「社交」や「交際」を含む多数の雑書資料をもとに、当時の社交や学生、女性、性欲や脳科学に進化論などを自由に語ったが、雑書の作者たちは一流の「言論リーダー」としての知識人ではなく、「二流の知識人たち」だったと考えた。また「社交」が輸入された思想であり、これが求められた理由として「人々が移動する時代においては、立身出世し一旗あげるためには […] 見知らない他人と積極的に関わらなければならなくなった」¹²からと述べ、「修養」的性格の書物成立に立身出世の追求をみた。石原の考察を受け、伊藤かおり¹³は、近代日本における「交際社交術」がいかに語られたかを追い、その際に社交術書をその「社交」の語られ方で4つの傾向に分けた。

これらの先行研究を踏まえて、本稿の関心は、竹内の分類でいえば明治後半から大正初期にかけての「人間関係の技術や理想像を教えるものとしての作法書」、あるいは石原が言う「二流の知識人」たる書き手によって明治・大正期にかけて多数あらわれた通俗的読み物のうち、社交および交際を題材とする作法書に向けられている。その点では、「礼儀作法書」を丁寧に分けた竹内の関心と方向を同じくするものである。そこで、とくに明治後期に「社交」および「交際」を題材とする作法書が多く刊行された時代的背景をおさえつつ、伊藤、竹内らの問題意識

7 熊倉功夫『文化としてのマナー』(岩波書店) 1999.

8 薄井明「〈日本近代礼法〉の形成過程 (1)」〔『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第10号, 2003〕、「〈日本近代礼法〉の形成過程 (2)」〔『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第11号, 2004〕、「〈日本近代礼法〉の形成過程 (3)」〔『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第12号, 2005〕

9 2012年に開催された筑波大学附属図書館の特別展「明治時代に礼法はいかにして伝えられたか—出版メディアを中心に—」においても、豊富な図版資料とともに描かれたのは、明治時代の女子教育においておこなわれた礼法教育であった。

10 竹内里欧「〈紳士〉という理想像の誕生と展開—近代日本の礼儀作法書にみる」〔京都社会学年報編集委員会編『京都社会学年報』第11号 (2003) 13-28頁〕

11 石原千秋『百年前の私たち—雑書から見る男と女』(講談社現代新書) 2007.

12 石原上掲書, 20頁.

13 伊藤かおり「明治期における〈交際社交術〉の語られ方—漱石文学への視座として—」〔早稲田大学教育総合科学術院『学術研究—人文科学・社会科学編—』第63号 (2015) 21-34頁〕

を踏まえて、『處世交際法』と「智恵袋」「心頭語」がいかにか位置づけられるかを探る。

2.2 社交術書の傾向と時代ごとの分類

伊藤は福田琴月の以下の言を引きながら、当時の「交際」や「社交」の語を区別する。「〈社交〉は社会での個人間の付き合いを意味するのに対し、〈交際〉は国同士のつきあいから社会的な付き合い、より身近なつきあい」をよび、「社交」よりも「日常に浸透した」広い意味の言葉だという。¹⁴

社交は学問でなく、一の技術であるから、厳密に其定義を示すことは、困難である、然し交際とは、少し其意味が違ふ。一家の中で兄妹姉妹が遊び戯れるのも、学校で朋輩同士が遊ぶのも、親族知己の往来も、裏店の井戸端会議も、皆凡て交際であるが、社交はそんな交際よりも、一步進んで、中流社会の交際、模範となるべき交際を謂ふのである。¹⁵

福田においては「社交」は「一の技術」であり、「中流社会の交際、模範となるべき交際」であり、「処世術」あるいは交際上のモラルが「社交」と呼ばれている。対して「交際」は、対象の定まった個別の人間関係におけるつきあいを意味する。しかし実際のところ、当時の様々な社交指南書を並べて見れば、「社交」も「交際」も厳密に区別して使用されていたようには思われない。¹⁶そこで伊藤は「社交」術が何を強調して語られたのかを追うことで、その変遷が確認できるとし、「社交」術の語られ方を四つの傾向に分ける。第一の傾向は「人間の本性として〈社交を語る〉もの」、次に「交際上のマナーとしてとらえるもの」、第三に、「人格の修養としてとらえるもの」、最後に「〈出世〉のための技術として重視する」傾向である。¹⁷必ずしもこの四傾向にすべて収まりきるものではないとしながらも、上記四つの傾向をひとつの時間軸に沿って変遷していくかのように記していることには疑問を抱かざるを得ない。むしろ同時にあらわれ、複数の傾向がひとつの著作に含まれる場合もある。しかし伊藤の四つの傾向は、確かに社交指南書を分類検討するひとつの指針にはなり得るだろう。

「社交」術書の第一の傾向としての「人間の本性として〈社交を語る〉もの」については、時代的にまずこの傾向が表れたのではなく、「社交」を主題とする作法書の紋切り型の決まり文句のように序言部分におかれたものと推察する。伊藤は1893（明治26）年の『處世交際法』¹⁸の「自序」が「人類は社交の動物なり」という宣言で始まっていることを指摘するが、石原が指摘するように明治30年代以降明治末期に至るまで、同種の文言が散見されるし¹⁹、笛川訳の1910（明治）年の『處世交際法』にも、訳者緒言で以下のように語られているのだ。

抑も社交とは何ぞや、先哲の所謂『神か野獣』にあらざる以上、吾人の本能に基く彼我心霊の結合にあらずや、この結合ありて始めて意義あり、人生始めて趣味あるにあらずや、

14 伊藤上掲書、23頁

15 福田琴月『交際と談話』（博文館）1911.

16 書名についてのみ言えば、国立国会図書館の近代デジタルライブラリー（<http://kindai.ndl.go.jp/>）で明治時代の資料に限定して検索してみれば、「社交」（13件）よりも「交際」（187件）が含まれるものが圧倒的に多い。

17 伊藤上掲書、23頁。

18 槐堂居士『處世交際法』（博文館）1893.

19 石原上掲書、48頁。

社交を棄つるはまさに生命の一半を棄つるものにあらずして何ぞ。²⁰

「先哲の『神か野獣』」とはアリストテレスの言う「共同体に入り込めない者、あるいは自足して他に何も求めることのない者」²¹であろうから、「『神か野獣』にあらざる」存在としての人間とは、「ポリス的動物」(ζῷον πολιτικόν)に他ならない。どの書において初めてこの文言が出てきたのかについては今のところ不明だが、人間を本質的に社交する存在としてとらえる姿勢は、西洋的社交生活の根底にある思想として交際指南書執筆の前提であり、おそらく常套句と化していた。笛川の『處世交際法』もいわば流行に乗じて、『處世交際法』の緒言に組み込んだのだろう。

さて竹内の場合は、明治時代を初期から中期までの前半と、中期から大正初期にかけての後半とに区切って分析する。前半期の「礼儀作法書」には「西洋文化」の導入と紹介に重点が置かれる著作が主流だとし、『欧米礼式図解』²²や『英国交際儀式』²³、『泰西礼法』²⁴を引く。これらの著作は、宴会時に友人と出会った時の声のかけ方、出産後の儀式など、確かに未知の習俗としての西洋文化を時には図版入りで紹介しており、西洋式のエチケットとしての作法を羅列したものであった。一方明治中期以降の後半期については、「交際」「社交」をキーワードとして、従来の型どおりの西洋式礼儀作法を並べ立てるものではなく、交際の場における臨機応変な振る舞いに巧みであることを理想とする類の著作が多く刊行されたことが指摘される。『西洋男女交際法』²⁵、『人をチャームする応接の仕方』²⁶に見られるような交際相手の気持ちを掴むための談話法や、駆け引き的な振る舞いを語るこれらの作法書は、立身出世のための行動指針的役割を担ったと竹内はとらえている。とくに明治後期にこの種の作法書を多く著した作家として蘆川忠雄²⁷を挙げ、彼が従来の作法書を「日本従来の習慣たる小笠原流礼法を説くものと大差あらず」と批判し、交際術が習得可能な「一種の技術」であると述べていることを指摘している。

しかし明治後半の社交術書に関しては、時代的背景も考慮する必要がある。明治時代に立身出世を論じたものとしては、すでに1871(明治4)年に中村敬宇(正直)の訳による『西国立志編』²⁸が刊行され、翌年刊行の福澤諭吉の『學問のすゝめ』ともども、好評を博していた。『西国立志編』は、初めは「修身」の教科書として学校教育で使用されたが、明治20年代には過去のものとしていったん読まれなくなった。²⁹再び読まれるようになったのは1906年(明治39)年に畔上賢造が『自助論』の題で改訂版を出してからである。時期的には竹内が指摘する明治後半の「交際」「社交」の書の人気にも重なるが、これは日清戦争後の実業ブームおよび日露戦争後の指南書ブームという背景を考え併せるべきだろう。日本の立身出世について丹念に分析

20 笛川上掲書、2頁。(訳者緒言)

21 アリストテレス/田中美知太郎ほか訳『政治学』(中央公論新社)2009、19頁。

22 ハウトン(北村金太郎訳)『欧米礼式図解』1886。

23 著者不明(渡辺豊訳述)『英国交際儀式』1879

24 著者不明(高橋達郎抄訳)『泰西礼法』1887。1878年版あり。

25 著者不明(宮本桂仙訳)『西洋男女交際法』(博文館)1906。

26 石角春洋著『人をチャームする応接の仕方』(九段書房)1921。

27 『交際談話術』(青木嵩山堂)1904、『常識の修養』(実業之日本社)1905、『応対談話法』(実業之日本社)1906、『観察力修養』(実業之日本社)1908、『交際術修養』(実業之日本社)1909ほか。明治後期から大正初期にかけて、数十冊もの作法書を刊行した。

28 Samuel Smiles: Self-Help. with Illustrations of Character and Conduct. (John Murray) 1859. を訳したものの。

29 早川勇「明治における西洋文化の受容ーサミュエル・ジョンソンの場合ー(その2)」〔愛知大學文學會『愛知大學文學論叢』150(2014)100-77頁〕88頁

をおこなったキンモンズは日清戦争後に青年たちが実業界に大きな関心を抱いたことを、「戦争によって経済成長が促進され、その結果、出世が金銭的な基準で定義されるようになった」³⁰と述べている。

ところが富国強兵を達成した国家にもはや自らの目標を重ねることの出来なくなった若者たちは、自らの人生をいかに生きるべきか煩悶し始めた。国木田独歩や高山樗牛が示したような、国家のために立身出世に励むことを望まない態度が顕著となり、日露戦争後には「煩悶」する青年たちが強く問題視されるようになる。近代的自我としての個の確立とともに、伝統的道德に対する懐疑を生じ、「立身出世」に価値を見いだせなくなった煩悶青年たちだったが、彼らに対してあらわれた反応のひとつに「修養」の思想があった。内面的自立の願望を求めて人格向上と人間形成のための思想としてあらわれた「修養」に基づく教訓、処世訓的な書物は、新渡戸稲造の『修養』³¹を始め、若者間でよく読まれた。竹内は立身出世のための作法書として蘆川の著作を例示したが、むしろ人格形成のための「修養書」と位置付けられるのではないか。1900年代初頭の蘆川の著作も、『観察力修養』『交際術修養』『克己心の修養』『常識の修養』³²など「修養」の語を冠するものが目立つ。蘆川が『交際術修養』において「思ふに交際術の教ゆる所は、[…]之を修養するに於ては、[…]性癖、態度を矯正し、自己の品性、人格をして一段高きに置かしむべき傾向を有せしむ」³³と述べ、「品格」をその交際術に重視したことも裏付けとなろう。

明治後期のこの思想的社会的状況を振り返ってみると、明治前半こそは交際の作法書には西洋的知識の取り込みの機能があっただろうが、明治後半に至っては、明治初期から支持されてきて日清戦争後に隆盛を見た立身出世向けの作法書と、日露戦争後の「煩悶青年」たちの問題を受けての「修養」書の流行という社会状況を踏まえておかねばならないだろう。

3. 鷗外訳と笛川訳の位置づけ

前節で把握した作法書史において、鷗外と笛川のそれぞれの翻訳はどのように位置づけられるのか。クニッゲの『人間交際術』自体は、「世間と社交の場において、幸福かつ満足に他の人々と生活し、隣人を幸福かつ愉快にさせるために、人間はどのように振る舞うべきか」³⁴を追求したものとクニッゲ自身にとらえられているが、この翻訳のしごとを詳しくみながら、笛川と鷗外がどのようなものとしてとらえているのかを探ろう。

『處世交際法』は1910(明治43)年、日露戦争後の「修養」書ブームの中で刊行された。笛川は緒言で「吾人が日常不用意の間に刻々犯し居る萬彙の失行過誤を指摘し、巧妙穩健なる手練心術を訓へて、以て吾人の幸福を増進し、人生の眞意義を發揮」³⁵することに成功するものとして原書を理解していることがその緒言から読み取れる。クニッゲの原著の内容からしても、「人格の修養」を目指すものとして時勢に適合するものであった。

30 E・H・キンモンズ(広田照幸/加藤潤/吉田文/伊藤彰浩/高橋一郎訳)『立身出世の社会史—サムライからサラリーマンへ』(玉川大学出版部)1995. 146頁。

31 新渡戸稲造『修養』(実業之日本社)1911.

32 蘆川忠雄『常識の修養』(実業之日本社)1905、『克己心の修養』(実業之日本社)1907、『観察力修養』(実業之日本社)1908、『決断力修養』(実業之日本社)1908など。

33 蘆川忠雄『交際術修養』(実業之日本社)1909. 自序3頁。

34 Adolph Freiherr Knigge: Über den Umgang mit Menschen. (Insel) München. 1977. S.10, 笠原賢介・中直一訳『人間交際術』(講談社学術文庫)1993. 5頁

35 笛川上掲書, 3頁。(訳者緒言)

抄訳の程度に関しては、節の省略や、複数の節の纏め直しが見られ、日本では通用しない西洋的な交際の例は省かれている。たとえば序論内でドイツの交際状況に関して語られている箇所では、各地方の固有名詞は避けられ、段落ごと翻訳されずに簡潔にまとめ直されている。このように各節の文章は全般的に簡潔な要約が成され、多少の加筆が施されてはいるが、『人間交際術』の三部構成や章立て、各章内の節などがほぼ同じ構成で訳されていることからすると、笛川が基本的には底本にできるだけ忠実であろうとした様子が見て取れる。すでに述べたように本来的に人間を「社交する存在」ととらえている。笛川は西洋的社交の表面的所作を持ち込もうとしたのではなく、西洋的社交の思考方法を当時の日本に受け入れられるべきものとして翻訳をおこなったのだろう。

一方の森鷗外の場合はどうだろうか。「智恵袋」は、1898（明治31）年8月9日から10月5日までにわたり、『時事新報』紙に連載されたものである。「心頭語」のほうは、明治33年2月1日から2月18日までの約1年にわたって断続的に『二六新報』に掲載された。いずれもクニッゲの『人間交際術』の抄訳ではあるものの、「智恵袋」は翻訳であることがその「鷗外訳補」の署名からかろうじてわかる程度で、底本が何であるかは全く知らされなかった。「心頭語」は翻訳であることすら言明されていなかった上、「千八」という匿名による執筆であった。日本の社会状況を踏まえた鷗外自身の知見による加筆という点では笛川と同様だが、「智恵袋」と「心頭語」に別個のものであるかのように分けられ、各項目は「一 自ら定むる価」「二 無過の金箔」「三 人並」「四 人の短」「五 人の長」など前後の順はおおよそ守られているが、原著の章立ては無視され、かなりの項目が省略され、残ったものも自由に組み直されている。各項目の主題は原著のどおりではあるが、鷗外自身の見解や日本あるいは中国の典籍が取り入れられ、かなりの加筆が見てとれる。また連載の形式をとり、後に独立した作品として単行本の形では纏められることがなかったためか、笛川の「訳者緒言」のような鷗外自身の意図がうかがえる文章はない。しかし原著の序論のうちから翻訳された「序言」を見てみよう。

能く頭角を顕はして、而も忌まれず妬まれず、能く人の意を承けて、而も曲げず諛はざらんは、まことに容易からぬ事にて、この教や、道德の書に見えず礼節の書に見えず、有らまほしき人に無くしてその窮を致し、無くて好き人に有りてその通を致すとやいふべき。此篇題して知恵袋といふ。³⁶

この部分は原文中の序論を鷗外流に要約したものと考えられるが、とくにこのような記述に対応する箇所はクニッゲの原文にはない。「能く頭角を顕はして、而も忌まれず妬まれず、能く人の意を承けて、而も曲げず諛はざらんは、まことに容易からぬ事」と述べるくだりは、小堀が指摘するように、たしかに鷗外自身の伝記的背景を思い起こさせる。「智恵袋」および「心頭語」執筆の時期は、陸軍省当局からの圧力が少なからずあった明治30年代の文業不振の時期、また同僚の小池正直に昇進を出し抜かれ、その後小倉へ左遷されるという個人的不遇の時期と重なるのである。だがこの重なりは鷗外の当時の心情が語られていない以上、推測に過ぎない。

「智恵袋」の連載された時期を上記の作法書史の視点から見てみると、日清戦争後の好景気の時期で、世の中は立身出世を目指す機運が高まっていた頃だろう。すでに国木田独歩は「煩悶」の語を好んで使い始めてはいたものの、社会の中で問題視されるまでにはまだ時間があつた頃だ。「智恵袋」「心頭語」はそもそもその内容として「人格の修養」を目指す傾向を有するが、しかしあえて「煩悶青年」たちに向けて語りかけたものとは言えない。

36 小堀上掲書、27頁。

ここで伊藤が第三の傾向「人格の修養」をもつ作法書の例として挙げている土屋元作の『内外交際心得』に注目してみよう。『内外交際心得』は、鷗外が「智恵袋」を連載した『時事新報』紙に、1899（明治32）年8月4日から26日まで掲載された内容が1900（明治33）年にまとめられたものである。³⁷ 社交や交際に関わる連載が『時事新報』に継続して掲載されたのかどうかは不明だが、新聞紙上での掲載の形をとる社交指南が当時行われていた可能性は十分あり得る。これは今後の課題としたい。

4. おわりに

「社交」や「交際」を扱う作法書史は、先行研究にはとくに日露戦争後の「修養」書の位置づけが十分に検討されていなかったことがわかった。また「社交」と「交際」それぞれの概念規定についても、考察が不十分である。交際術の作法書を対象とすると、史料が広範にわたる上、身体的振る舞い（マナー）あるいは「礼法」を切り分ける困難がある。だが笛川の『處世交際法』が、単なる西洋社交文化の紹介としてではなく、「立身出世」志向とは切り離された、明治後期の「煩悶青年」に対応する動きとしての人格的完成を目指す「修養」書の一種として位置づけた点を、本稿の成果としたい。一方で、鷗外の「智恵袋」「心頭語」については作法書史の中で単純に位置づけることは難しい。だが『内外交際心得』の存在から、『時事新報』紙に連載された交際指南という切り口を得た。今後は「社交」や「作法書」に関してより厳密な概念規定を行いながら、鷗外の「智恵袋」「心頭語」に関わる課題に取り組みたい。

37 小堀上掲書、3頁。